

『江戸図屏風』の世界、その描く情景  
—駿河大納言忠長邸の建築描写について—

正会員 ○古川敏夫

江戸図屏風 台徳院靈廟 駿河大納言邸  
御成り門 徳川頼宣 江戸城

## 1. はじめに

六曲一双の『江戸図屏風』(以降、『屏風』と呼ぶ)が昭和40年(1965)に発見されて以来、その解題については多くの研究者がそれぞれの専門分野で論考を深めてきた。建築分野では内藤博士は「江戸の都市と建築」(1972 毎日新聞社刊)のなかで『屏風』の景観年代について上限を寛永10年1月24日の増上寺圓山山上の五重塔完成とし、平井博士は「江戸図屏風」(1971 平凡社刊)で『屏風』の建築描写は景観年代の決め手にならず、明暦大火以前の江戸の姿を表している、とした。

その後、『屏風』は1981年に国立歴史民族博物館(歴博)所蔵となったが、「明暦3年の大火(1657)以前の景観が描かれ、徳川家光の事蹟を顕彰するために制作された」(2007 江戸東京博物館の『江戸城』展)とあるように、今日まで『屏風』の主題、景観年代、制作者、絵師等の解明については進んでいない。

本稿では『屏風』中の一場面である大納言忠長邸の描写を通して、絵師が將軍家との確執から忠長廃絶という事実と直面し、忠長邸の情景をどう精度ある描きかたをしたかについて述べたい。また、『屏風』の描く江戸の情景について若干の解題を述べたい。

## 2. 忠長邸と高駒寄せの描写

大納言忠長邸の描写は『屏風』の製作された年代を左右する重要な手がかりを与えている。忠長邸の御成り門前には大勢の武士が物見胡散で見物をし、門番もないこの情景はこの家主が明らかに不在であることを示している。二人の武士と一行が眺めている平棟門前は蟄居閉門の状況を描いて、跪いているのは家士であろうか、最後の別れの情景にも見える。忠長は「寛永7年10月、安養山の奥縁子で1240余頭の猿狩り」(徳川実記)を行い、そして蟄居の一因になった凶暴さを『屏風』は猿曳きで示している。

忠長邸の蟄居閉門の様子について『屏風』は非常に丁寧に正確に描いていることが判る。『屏風』中では御三家、各大名邸の御成り門、平棟門近くには高駒寄せを描いて、よく見ると平棟門と高駒寄せの扉が開かれて家士の出入り、人の往来があるのに対して、忠長邸の建築描写は平棟門と高駒寄せの出入り口扉が閉ざされて、邸内が静まりかえっているのが判る。

高駒寄せについては「明暦三大火事の時迄は國主大名の御門前には高駒寄せとて溝橋の外に高さ八尺許の高矢来土臺立子柱五六寸にて小間返に立笠木を通し貫二通入扉矢来子の通に肘釣に隔通も有之古来の兩折戸の如くなり」(中央公論美術出版 日本建築基礎資料集成17 向念覚書)とあるように、『屏風』では高さを少し低く描いているが、高さが8尺ほどあり、邸内への通用口として両折れ戸から入る形式であった。

## 3. 忠長失脚の伏線と酒井忠勝との確執

忠長邸の御成り門の描写は向唐破風、両切妻破風として正確に描かれている。將軍家の忠長邸への御成りは寛永年間に11回ほどあり、寛永2年2回、同4年4回、同5年2回、同6年3回、其のうち寛永6年5月23日に家光が、同6月1日に秀忠が行ったのが最後となっている。家光が寛永8年2月3、4日に本城において連日茶事を行い、そして忠長は続く5日に大御所の西城で陪席した茶事を最後としている。この茶事は秀忠が家光、紀伊頼宣、忠長の近親者のみで行った最後となった。3月に入って秀忠は腫れ物を患い床に伏せることになる。

2年前の寛永6年2月(1629)に酒井忠勝と忠長との間で一つの事件があった。家光が疱瘡の大病を罹った時、本城に見舞いに来ていた忠長は將軍と同じ湯漬飯の膳を仕度させたことが忠勝の逆鱗に触れた。その顛末は「大猷院君御痘瘡之節昼夜詰切御看病申上一旦御六ヶ敷被為入侯付日光山 東照大権現奉初諸国並領国之神社江奉祈

Study on the world of the Edozubyobu—the scene to draw, description of Surugadainagon Palace

Furukawa Toshio

御快然侯 右御病中一日御膳所江相越侯要御上リ之御膳ニ通仕立有之付忠勝役人ニ相尋侯一者奉大猷院君一者為奉駿河大納言忠長卿也與相答侯付其時命役人令徹之厲聲日何事哉為臣子者日夜忘霞食御看病可申上儀也忿激而入奥時之人感其忠烈之志此時大猷院君未 若君様無之駿河殿者乃大猷院君之御弟ニ而駿甲二国之主故威勢有之」(酒井家文書 空印寺殿年譜) に詳しい。

この件は翌日秀忠から忠勝へ「秀忠公ノ 御前へ召ニ依ヲ為出玉ヒケレハ 家光公ノ御客体ヲ委敷尋サセ玉ヒ唯今 家光公ノ御方へ入御可有 忠勝君ニ御先立セサセ給フヘシト 上意有シ也初被召ケルキハ昨日ノ忠長卿への無禮ヲ聞シメシ如何成御答メノ台命ヤ蒙ント思召ルルニ件ノ上意ニテ安堵セサセ玉ヒシト」(同 御年譜) お答めなしとなり、家光が本復した後、寛永8年(1631)に忠勝は東照宮へ病氣平癒の立願成就によって『屏風』に見られる「7間四面の本地堂(薬師堂)を寛永寺の東照大権現宮境内に建立」(同 御年譜) している。

#### 4. 忠長失脚の情景と忠長邸の景観年代

秀忠は寛永8年3月病状が平伏に向かった機会に、忠長の振舞舞いが凶暴ということで、自ら寛永8年4月に所領甲州へ蟄居養生を命じて、忠長は同5月28日甲府の配所に着いている。まだこの時点では家臣の鳥居成信が忠長邸を守護するため配置されており、除封には至っていない。その後忠長は金地院崇傳を介して数度の赦免を願ったが、頼みの秀忠はすでに病臥に伏し、寛永9年正月24日に没した。最大の庇護者を失った忠長は同年10月には高崎に幽閉、封地は没収、駿府には城番が置かれた。同11月には家臣配流の処置が下り、失意の中で寛永10年12月6日、29歳で自害に及んでいる。

その後、寛永11年12月に忠長の1周忌が済んだ後、大納言忠長邸は旧邸の一部が忍が岡の先聖殿(『屏風』に押紙はないが先聖殿らしき建物が描かれている) 傍らに移建された。これらのことから、『屏風』を描いた絵師が政変の情景を非常に注意深く描いていたことが判る。

『屏風』にはまだ「駿河大納言殿」の押紙があること、邸宅が閉門であることから、忠長が封地没収、除封になる寛永9年10月以前の情景を描いていると言えよう。

#### 5. 『屏風』に関する若干の解題

『屏風』に関する発表論文や解題は多種にのぼるが、その制作者と絵師の解明はなかなか困難を極めている。今論文前に『江戸図屏風を歩く』(2007江戸の暮らし辞典中 学習研究社刊) と題して『屏風』について解題する機会を得た。その中で、『屏風』には幾つかのレトリックな描写があること、また大名家の御成り門、酒井家家紋、紀伊大納言頼宣について若干の考察を述べた。

その中で『屏風』の主題は寛永11年正月24日に芝増上寺に於いて厳粛な中で行われた徳川二代將軍秀忠の3回忌法会を描き、主として寛永・元和期の秀忠の事蹟を時間と空間を遡って時系列的に展開して描いていることを指摘した。江戸城二の丸拡張、外郭総構えや本丸改造、寛永度天守築造が完成するのが寛永13～14年であるから、『屏風』の景観年代とは一致しないことは明らかである。また、本丸総構えが完成していない為、絵師は巧みに金雲間に隠して描いている、ことが判る。「明暦大火以前の景観が描かれ、家光の事蹟を描き、寛永度築造天守が聳える江戸の町である」という論点は間違っているといえよう。

では、この『屏風』の制作者(依頼者)は一体誰か。また何の目的で制作したのだろうか。この『屏風』の制作者はただ一人『屏風』中で押紙のない人物である紀伊大納言頼宣であると指摘した。頼宣は秀忠の死後、まもなく寛永9年に和歌山城下の岡山に大智寺を創建し、翌年芝増上寺に倣い方5間の台徳院霊屋を建立したことは「御譜略に曰く是年寛永九年紀府に大智寺を御創建あり台徳公之御霊牌所とし給ふ翌酉年御霊屋造畢戊午年寺造畢」(南紀徳川史) に詳しい。芝増上寺での3回忌法会の後すぐに兄秀忠の菩提を弔う為に大智寺台徳院霊屋に於いて芝増上寺に倣い3回忌法会を行っている。『屏風』はこの法会で秀忠を追善供養するため制作し、『正一位台徳院殿追善供養図屏風』として上覧したものと思われる。

#### 6. おわりに

今後、『屏風』の解明について、『屏風』中の幾つかのレトリックな描写場面や絵師の描法を研究、考証することによって、製作者=紀伊大納言頼宣が何を絵師に注文し、絵師は何を描こうとしたか、『屏風』に描かれた「江戸の情景」を明らかにしていきたい。